

## 2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

連合本部 連帯活動局 青柳久子

今回のツアーに声をかけていただいた時、シニア・スタッフなので遠慮したほうがいいのか迷いましたが、上司や同僚から快く送り出して頂き、参加することができました。

参加して、CSAの活動の歴史と意義を改めて勉強し理解することができ、文字通りの「スタディ・ツアー」となりました。ラオスは、「穏やかで、きれいな国」という印象を持ちました。イメージとしては、貧しい国、貧しいイコール少し不潔（ごめんなさい）という不安がありました。

しかし、建物や店構えは質素でしたが、街にはゴミも落ちておらず、不潔感は全く感じませんでした。

ただ道路の砂埃は酷かったのですが、物乞いする人もいないし、押売りしてくる人もいません。車の通りが激しい所で牛が歩いている、車は牛をよけて上手く走り抜け、ほとんどクラクションを鳴らさないのには驚きました。なんて穏やかな人達が多くて落ち着いた国なのだろうと思いました。また、食事は野菜が多く、とても健康的な食生活だと思いました。



卒業生と一緒に

このツアーを通して、特に考えさせられたのは、CSAの支援活動の中の教育支援についてでした。もちろん、中古衣料の支援は重要です。現在「衣」に困っている人を救うことは大事な支援だと思いますが、小学校の建設・補修、高校生寮の建設・運営などの教育支援は、ラオスの国の未来の発展に役立つ素晴らしい支援であると改めて思いました。

小学校では子どもたちの屈託のない元気な笑顔が印象深かったです。でこぼこ道を延々と車で移動して、2つの小学校を訪問しました。校舎の一番目立つ場所に「連合ロゴ」を発見した時、CSAの活動を通じて連合の組合員の善意が届けられていることを実感しました。

最初に訪問したターディンデンタイ村の小学校は児童数が400人。事前に、全員でのゲームを希望するとの情報を得、訪問の前夜にメンバー全員で真剣にゲームの打ち合わせをしました。決めたゲームは、ジャンケンゲーム、綱引き、ボール回しでした。当日は、名頭菌団長がホイッスルを吹くと、子どもたちが一瞬で真剣に団長の方を見つめ、団長の身振り手振りの説明をすぐに理解してくれました。ゲームはとても盛り上がり、子どもだけでなく先生も私たちも一つになって、楽しいひと時を過ごすことができました。その後、先生方の手作りのランチをご馳走になり、とても美味かったので、おかわりしてしまいました。

2校目のコンケオ村小学校の訪問は、「校舎の屋根や天井の補修の確認」と「中古衣類の引き渡し」が主な目的でした。代表の子ども達との記念撮影で終了するつもりでしたが、私達の姿を見つけた生徒たちが満面の笑顔で次々に校庭に飛び出してきたので、全員ゲームをすることになりました。ちょっと恥ずかしがり屋の純粋な子ども達とのふれあいで、私たちの方が童心にかえって心から楽しませてもらいました。

高校生やその卒業生の皆さんとも交流しました。CSAは「遠隔地高校生支援事業」として、

サンティパープ高校生寮を運営しています。優秀だが家が貧しくて高校に進学できない子どもたちに寮を提供し、高校に通えるように援助する事業です。寮では熱烈歓迎を受け、歌やダンスも披露して頂きました。寮は4人部屋でベッドも勉強机もとても粗末なものでしたが、一生懸命勉強に励み、明るく、希望に満ちた未来をはずかしそうに話してくれた高校生達の笑顔が印象的でした。さらに、ビエンチャンでは、日本食のレストランで卒業生35人とも交流をしました。大学生も、社会人も皆、CSAの支援のお陰で高校に行け、また大学へ進学することができたことにとっても感謝しており、意欲をもって勉強している様子が感じられました。勤勉でしっかりとした考えをもち、ラオスの国や家族のために働いていくという姿勢に、とても感銘を受けました。皆さん英語のできない私に、優しく、身振り手ぶりで一生懸命にコミュニケーションをとってくれました。感謝！

また、連合の「愛のカンパ」の助成団体である「難民を助ける会」のビエンチャン事務所を訪れ、ラオスにおける車椅子の製造・普及など障がい者支援策についての報告を受けました。連合が果たすべく社会貢献活動を現地のNGOの皆さんが「見える形」で具体化されていることに対し、心より感謝の意を表します。

今回のツアーは、連合の活動がラオスやタイの人たちの役に立ち、感謝されていることを実感する有意義なものとなりました。そして、期待以上の経験ができました。この経験を今後の仕事や人生に活かしていきたいと思えます。

最後に、豪快に楽しくリードいただいた名頭菌団長、細やかに気配りいただいた吉野副団長、そして、いつも支えていただいた山岡事務局長や団員の皆様、大変お世話になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

## 2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン 三越伊勢丹労働組合 中村 健志

まず初めに、今回のツアーに参加させて頂いて、自分の人生において、またとない貴重な経験をさせて頂きましたことを、CSA事務局の皆さまと、この機会を与えて下さったUAゼンセン及び組合に深く御礼申し上げます。

今回は、様々なことを経験させて頂きましたが、何よりも直接現地へ赴き、実際に衣料を受け取って頂いた子どもたちや、CSAの支援したサンティパープ高校生寮生や卒業生達と交流し、その声や想いを聞くことができたのは、これからも組合で活動をしていく中で非常に大きな意味を持つ経験となりました。

私はまだ組合に入ってから日が浅く、CSAの活動や実態などは勉強不足で、ほとんど認識していませんでした。その中で、普段から組合のメンバーが非常に力を入れて取り組んでいる「中古衣料の募集」について、メンバーを代表して実際に引き渡し式や、受け取る子ども達と交流ができたことを誇らしく思います。

ラオスにて、19番目校と3番目校に訪問した際には、それまではテレビやPCの中でしか見たことのなかった世界が広がり、強い衝撃を受けました。しかし、すぐに子ども達が私達を恐れる事も無く、屈託のない笑顔を見ることができた時、それまで持っていた不安も消えました。

そして、実際に日本から送られていた服を着ている姿を見て、私たちの活動は決して無駄ではなかったと心の底から感じることができました。

事前に学習していたことではありましたが、ラオスは日本とは大きく異なり、現在でも子どもの数は増え続けており、経済状態も決して良いものではないということを肌で感じとることができました。同時に日本がいかに豊かで、恵まれた環境にあるかも身に染みしました。このことから、やはり先進国である我々が、CSAがやっている様な支援を可能な限り継続していくことは、たとえそれが小さなことであっても、ラオスの人達にとっては必要なのだと強く実感しました。

また、事前に頂いた資料を見て初めて知った、「サンティパープ高校生寮」の設立と維持運営というCSAの支援について、実際に卒業生達と交流し、寮に直接訪問し、寮生達の生の声を聞くことができたのも、非常に大きな経験となりました。まず、16日の卒業生達との交流で驚いたのが、数多くの卒業生一人一人が非常に優秀で、その中の何人かが外務省等の国の運営に関わる様な大きな仕事に就いているということでした。彼らは、CSAの支援がなければ、高校に通う事も難しい状況で、彼ら自身が大変な苦労と努力を重ねてきたのだということを、直接会ったことで初めて知ることができて、胸が熱くなりました。そして、何よりも彼ら全員が、その様な優秀な仕事に就いているにも関わらず、とても優しく穏やかで、我々の拙い英語での会話に対して、一人一人が丁寧に答え、笑顔で接してくれたことが、ただただ嬉しかったです。



一緒に写っているのは、札幌丸井三越の  
マスコットキャラクター「みつ子」

同様に、19日にサンティパープ高校生寮に直接訪問した際にも、数十名もいた寮生の一人一人がとても暖かく迎えてくれて、精一杯のおもてなしをしていただいたことも、本当に嬉しく思いました。また、実際に寮生の部屋を見て、一人一人に与えられたスペースが本当に僅かなもので、教科書や参考書も新品では無い物ばかりだったのが胸を打ちました。この様に決して満足とは言えない様な環境で、国内でもトップを取るような優秀な成績を修めた子ども達は一体どれだけの努力を積み重ねてきたのかを思うと、本当に頭が下がる思いでした。何よりも、卒業生も、今も努力し続けている寮生達も、CSAがやってきた支援に対して、言葉では言い表せない程の感謝の気持ちを持ち続けていることは、CSAを支援する組合の一組合員として、とても嬉しく思いました。同時に、この様な素晴らしい人材を埋もれさせることなく、世の中に羽ばたく機会を作ったCSAの支援は、本当に素晴らしいことだと実感しました。

今後も、今回視察した様な今まで設立した小学校や寮の補修や、設備の強化など、今迄の行ってきたことに対してのフォロー等、課題はいくつもあるかと思いますが、今回参加させていただいた我々の様な組合員一人一人が、周りに呼びかけて活動や支援を継続し、広げていく必要があると強く思います。

最後に、今回の参加にあたり、CSA山岡事務局長をはじめ、団長・副団長を中心とした各参加メンバーの皆様、運営に携わって下さった多くの方々に支えられ、無事に全行程を終えること

ができたことを深く御礼申し上げます。ツアー前は多くの不安にさいなまれていましたが、いざツアーが始まると、メンバーの暖かさに触れ、非常に気持ちが楽になり、私自身にとって一生忘れることのない貴重な経験になりました。

今後は、皆様と経験したことを絶対に無駄にすることが無い様、活動の継続と呼びかけはもちろん、新たに活動の幅を広げることができるよう訴えていこうと思います。

## 2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン レナウン労働組合 名頭 蘭 由 希 雄



今回のツアーに参加し、貴重な体験・経験をさせていただきました事をCSA事務局の皆様、この機会を与えて下さったUAゼンセン及び自単組へ厚く御礼申し上げます。

自単組も長年に渡りUAゼンセンのボランティア活動の一環である「中古衣類・海外輸送費カンパ活動」に参加しておりますが、今回ツアーに参加し、自分の目で現地タイ・ラオスの救援衣類保管倉庫視察・関係省庁に訪問すること

で、我々の輸送した救援衣類の保管状況や、貧しくて救援衣料を必要とされている方々へ、どのようなルートで届けられているかを確認出来ました。

タイ社会開発福祉省で開催された救援衣類引渡し式では、初めてマスコミ関係者も出席し盛大に行われました。今迄のCSAの地道な支援活動をタイ政府やマスコミ・メディアも高く評価していると感じました。

また、衣類保管倉庫での担当者からは、箱詰め前のビニール袋包装やダンボールに貼る仕分シールが保管倉庫での作業効率向上に役立っている事や、男性の衣類が大きく不足している課題も把握しましたので今後の中古衣類カンパ活動に繋がりたいです。

CSAが支援している遠隔地高校生支援事業・サンティパープ高校生寮の卒業生35名との交流食事会では、ラオス外務省に勤務する卒業生代表が挨拶してくれました。卒業生は口々に「自分が今あるのはCSA支援のお蔭です」と感謝の言葉を述べ、ラオス発展や各々の夢を語ってくれました。彼らは非常に優秀で、今後数年でラオス政府機関に勤務する人や、専門分野においてラオスを支える卒業生が大勢現れる事を予感しました。

今回のツアーで印象に残っていることは、現地の人々の温かさです。常に「ありがとうございます」感謝の気持ちを伝えられました。小学校訪問でも先生や生徒達の笑顔に迎えられました。高校生達も、キラキラとした笑顔で感謝の気持ちと自分の将来の夢を語ってくれました。たとえ生活が貧しくても「幸せ」を感じることが出来るのがラオスの人々で精神的に豊かで幸せな国民性につながるのだと感じました。



訪問した小学生や高校寮生との交流会ではその都度、参加メンバーが楽しいゲームを下打合せして臨めたので、生徒全員と学校関係者が一体となり参加者全員で盛り上がりました。言葉は通じなくても、参加メンバーが一生懸命に取り組んだ結果が大成功という成果になったと思います。帰国して写真を見ていても笑いが出てきます！！

最後に、今回のツアーでは山岡事務局長に大変お世話になりました。

また5泊8日を共に過ごしたメンバーの皆さん、ラオスを通訳案内していただいたフンペンさん、本当にありがとうございました。

頼りない団長でしたが、副団長とチームメンバー皆さんの協力により滞りなく無事に終了できたことに感謝申し上げます。

## 2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン アンダーツリー東京ユニオン 泉 利雄



移動車内で

サバイディー！この度は、2017年ワーキング・スタディー・ツアーに参加させて頂きまして、誠にありがとうございます。また、CSAの山岡事務局長を始め、名頭菌団長や吉野副団長には団員をリードしていただき、大変感謝しております。ありがとうございます。

今回のWS Tにおいて、訪問する小学校であったり、各関係省庁であったりと、どこに訪問しても現地の方々の歓迎する姿勢に驚きました。裏を返せば、CSAがこ

れまで中古衣類を輸送する以外でも、学校の建設支援や高校生寮への支援など幅広い分野でラオス、タイへの支援を行っていることのも表れであるということがわかりました。

特に、印象的だったのが、ビエンチャンのターディンデンタイ村小学校やコンケオ村小学校の先生や生徒たちの歓迎ぶりでした。生徒たちは私たちを見て、目をキラキラ輝かせながら、ジャンケンゲームや綱引きを楽しんでいました。ただ、足元を見てみると皆、古いサンダルを履いており、綱引きをする時はそのサンダルを脱いで、裸足で綱引きをしている様子を見て、まだ多くの課題があると感じました。タイの中古衣類倉庫を視察したときに、倉庫で働いている女性から「履物を支援してほしい」という声がありました。現状では履物（靴）については海外からの輸送が困難であるようで、すぐに実現は難しいとのことでしたが、やっぱり運動をする時は、運動靴を履かせてあげたいという気持ちになりました。

また、サンティパープ高校生寮の寮生との交流も印象に残りました。寮生たちは私たちを迎えるのに校庭で二列になって、笑顔で迎えてくれました。室内では寮生による現地の歌を披露してくれたり、数名で踊りを披露してくれたりして歓迎の気持ちを表してくれました。家庭が貧しい状況の中で、家族を離れ、寮生活をしている生徒とは思えないくらい、純粋な笑顔が印象的でした。質疑応答の中で、「一番楽しみにしていることは、たまに家族と会えること、そして勉強を頑張るのは、貧しい家族を助きたいからだ」という答えに、ラオスの国民性を感じる事が出来た

と思います。その後、我々を歓迎する儀式として「バーシーセレモニー」を行っていただきました。祭壇を囲んで、全員が輪になって、村の長老を中心として私たちのための祈りを捧げてくれました。最後に、祭壇に祀られていた、スーフアン（ミサンガ）を長老を始めとする寮生全員が私たちの腕に、祈りを捧げながら巻いてくれている時、自分たちやその家族が貧困で困っている、相手の幸せを願う寮生の姿勢に強く心を打たれました。

全体を通じて、特にラオスでは、宿泊したビエンチャンの市街地と少し離れた集落の村を訪れたことで、貧困の差が激しいことが分かりました。市街地では道路も舗装されて、高級車も走っており、街中ではスマートフォンを手をしている若者が見受けられました。一方で村の小学校に向かう際、道路は舗装されておらず、大きな穴がいたるところにあって、車の横では牛の行列とすれ違う光景も見受けられました。日本もそうですが、地方にはまだまだ行き届いていない印象を受けました。

最後に、今回のWS Tでは名頭菌団長の活躍と存在が大きかったと思います。大きな声（しかも日本語）と笛だけで400名の生徒たちを統制した手腕に脱帽でした。ただ、残念だったのは、サンティパープ高校生寮のシャワールームで・・・これは内緒にしておきましょう。コプチャイ、ライライ！

## 2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン 教育社会運動局 浅山 哲也

今回のツアーに参加できたことは、私にとって非常に良い経験となりました。それは、UAゼンセンの局員として、社会運動・社会貢献における「中古衣料カンパ活動」の成果をこの目で見、実感できたからです。

私は、CSA活動について理解はしているものの、集めた衣料やカンパ金がどのように使われているのか、現地の方々はいったいどう思っているのか、タイ・ラオスの国の状況はどうなっているのか、はっきりわかっておりませんでした。



ラオス保健省のソムチット副官房長官と

ラオスは、日本の本州くらいの面積に650万人という人口で構成されており、日本から直接国際便でいけるルートはなく、いったんバンコクを経由しなければいけない国です。初めてラオスに降り立ち、早速ビエンチャン県のターディンデンタイ村の小学校を訪問しました。CSA活動の一つに「学校の建設・補修」があります。19番目に建設された小学校には400名もの生徒がいました。学校の必要性はその地域で学校に通えない子どもたちを受け入れること、そして現地ラオス語が学べ、後にラオスを背負って立つ子どもたちを育てることができることです。ラオスは47の他民族国家でありさまざま言語があるのですが、政府としてはラオス語を基本としているため、ラオス語を学ぶ必要があるのです。そんな子どもたちは本当に素直で、先生方の言

われることをきちんと守り、我々が考えた綱引きやボール遊びに対して笑顔で応えてくれました。

午後にはコンケオ村小学校（3番目校）を訪問しましたが、1997年に建てられた為「屋根の補修・天井の張替え・壁の塗り替え」の確認を行いました。作業はお金がないため、業者がやるのではなく先生方や村人が行うのですが、屋根の補修や天井の張替えは終わっていました。CSAの活動はただ単に学校建設だけではなく、その後の状況も確認しつつ、ケアをし続けていることで、学校が維持されていることがはっきりわかりました。もし、建設し、ほったらかした場合は、小学校自体がなくなる危険性があるのです。継続は力だと実感しました。

また、CSAはラオスで高校生の寮生に対して支援をおこなっているのですが、ルアンプラバン県のサンティーパーブ高校の寮生90名と交流することができました。支援している高校生はCSAの支援がなければ高校に通えない学生です。交流のなかで学生たちはCSAに大きな感謝の念をもっていました。その感謝に報いるために、学生たちは必死に勉強し、それぞれ夢をもっていることもわかりました。卒寮生とも懇親をおこないましたが、外務省で働いていたり、文部省で働いていたり、大学進学し大きな夢を持った方ばかりでした。CSAの支援がラオスで活躍する若者を確実に育てていることを実感しました。これは国と国とを繋ぐ大きな役割につながるのではないかと想像しました。

中古衣料に関しては、ラオス保健省、タイ社会開発福祉省、それぞれの国の省において、CSAで集めた中古衣料を倉庫で管理し、各県からの要請で取りまとめ、貧困に喘ぐ地域の方々へ配布されていました。ラオス・タイで冬用の服は必要なさそうでしたが、それぞれ北方の地域では雪は降らずとも気温が急激に下がるので、冬物も必要なことがわかりました。中古衣料は99%が使用可能なくらい現地の皆さんが喜んでいました。タイでは、引渡しの式典を公式にとり行って頂き、現地報道記者の方もいらしてました。各国の日本大使館にも訪問し、CSAの活動報告をし、逆に各国の情勢について学ぶ機会まで与えて頂きました。

今回のツアーは全てにおいて、初めての経験であり、我々の行っている社会貢献活動は、実績を残しつつ見守りながら、かつ新しいことにもチャレンジし、国を育てるすばらしい活動であることを身をもって学びました。

そして、何より一緒に参加した団員たちがすばらしい仲間でありました。団長や副団長を筆頭にすばらしい団結で全てのスケジュールを120%の形でこなすことができたと思います。事務局を務めて頂きました山岡さんにも心から感謝を申し上げます。

この活動およびツアーに関しても継続していくことの重要性を伝えていきたいと思います。本当にありがとうございました。



コンケオ村小学校への引き渡し衣類

# 2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 三菱重工労働組合 和田 諭

今回のツアーへ参加させて頂く機会をいただき、関係者の皆さま及び現地で受け入れ等をして下さった方々に心から御礼申し上げます。

ツアーを通じて、私たちの日常生活、そして今まで受けてきた教育環境について、その有難さを見つめ直して実感すると共に、まだ世界という単位でみると、それらの水準の差が大きいことを体感することができました。

特に印象深かった点は、小学校訪問、高校生寮訪問及び卒寮生との交流でした。

まず、小学校訪問に際しては、舗装されていない道路を延々と移動しなければ、辿り着けない場所にある村の学校を訪問しました。訪問した学校（19番目校・3番目校）は生徒が徒歩で通学するには結構な距離がありますが、それでも生徒数に対して校舎の大きさが足りておらず、藁ぶき屋根の簡易的な教室もありました。建屋の教室も、周囲は土の道路・校庭で囲まれているため、砂埃が舞っていました。また、教室内は自然光であり、日本のように蛍光灯やLEDで明るく灯されている状況ではありませんでした。



そのような環境でしたが、子どもたちは皆仲良く、そして楽しく私たちのゲームに参加してくれました。教育はもちろん、仲間との交流を通じて集団生活を学び、運動する場としても小学校が非常に重要な役割を果たしていることがわかり、CSAの小学校建設が、現地の子どもたちにとって、そして社会にとって大きな役割を果たしていることを実感することができました。

次に高校生寮訪問は、地方の貧しい学生が教育を受けられるようにCSAが建設したのですが、寮生との交流を通じて、ラオス発展に貢献したい、田舎の貧しい家族を支えたいという夢を持ち、具体的な将来の夢（職業）を持って勉強に励んでいることが伝わってきて、大変感銘を受けました。寮での生活は、限られた食費、窮屈な相部屋（4人部屋で、ベッドにも教科書が積まれている）、シャワールームやトイレ等、どれを見ても質素ですが、同じような境遇にいる仲間同士でお互いに助け合って学び、共同生活していることが伝わってきました。



コンケオ村小学校で

今回の行程では、寮見学とは別のプログラムで、卒寮生との懇親会に参加させて頂きました。卒寮生には、省庁や企業等様々な分野で活躍している社会人や、将来日本で働きたいという夢を持って勉強している大学生もいました。寮生・卒寮生から、勉強の機会を与えてくれたことや将来の夢を持たせてくれたことに対する感謝が伝わってきて、この場でもCSAの活動が貢献していることを感じる事ができました。

また、救援衣類の倉庫見学、引き渡し式にも参加しました。

タイ、ラオスともに、無数のダンボールの中から三菱重工労組のダンボールを偶然見つけることができ、日本で集めた衣類が無事に現地に届いていることが確認できました。ラオス北部の山間部では、焚火の周りで就寝している地域もあり、夏物に限らず冬物も非常に重宝されているとのことで、大変感謝されました。タイ都市部（バンコク等）では、一見衣類が溢れているような印象を持ちましたが、タイでは衣類がボロボロになるまで使う習慣があるため、タイ国内で中古衣類として寄付される衣類の大半が再利用できないとの話を聞きました。両国に共通することは、地方と都市部での貧富の差が激しいという点です。引き続き支援が必要であり、とりわけラオスでは救援衣類がまだ十分でないという印象を持ちました。

最後になりますが、今回のワーキング・スタディ・ツアーを通じて、CSAのボランティア活動がどのように役立ち、そして現地の方々からどのように受け止められているかを体感することができました。多くの方々がボランティア活動の大切さを体感し、更にこの活動が発展するためにも、今後も継続してこのような機会を作って頂けると幸いです。ありがとうございました。

## 2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 II労働組合連合会武蔵支部 吉野 雅彦



ラオス衣類保管倉庫で

本ツアーに参加して組合執行委員としての見聞を大きく広げる事が出来ました。機会を下さった基幹労連の皆さま、組合員の皆さま、ご対応頂いたCSA事務局の皆さまに心より感謝申し上げます。帰国してツアー期間を思い返すと、産別の違うメンバーで力を合わせ、一つ一つの訪問先で充実した対話・交流を図れたことが鮮明に脳裏に浮かびます。

CSA訪問団のプライドもさることながら、何より日々自分たちの活動の成果を肌で感じ取る事が嬉しく、また現地からの今までの感謝の意や更なる期待を組織の皆さんに伝える使命感に駆

られた日々でした。2017WSTチームの皆さんにも心から感謝します。

今までの組合活動におけるCSAとの関わりは、救援衣類の発送だけでした。その活動が現地にどのような成果をもたらしているのかを自分の目で確認する事がツアー参加の目的でした。また事前学習の中で自産別である基幹労連の貢献による小学校設立を知り、自身の組合費も困っている方への支援に役だっていたことを嬉しく思っていました。

しかし、本ツアーで現地を目の当たりにし、最も印象に残ったのは、もう一つの活動の柱である教育環境整備支援についてでした。想像以上に大規模に行われていたことと、それを現地の方や政府機関が深く信頼し、感謝して頂いていたことです。中でもビエンチャンでの2校の小学校

訪問や大学生・社会人となったC S A寮の卒寮生との交流、ルアンプラバンのサンティパーブ高校にあるC S A寮生との交流は一生忘れることが出来ません。

C S A寮の高校生や卒寮した大学生が「本来なら農村から出られなかった自分がC S Aのおかげで教育の機会を頂いた、このご恩に報いるにはもっと勉強して役人あるいは技師・教師となり、国のため、地方にいる親類のために寄与したい」と、将来の夢と希望を明確に持っていたことは、恵まれた日本からは想像できないことでした。この言葉を受けて、C S Aの活動は資金・物資の寄付のみならず対象国を支える人材育成も不可欠になっており、もはや一過性では済まない決して絶やすことの出来ない活動になっていると実感しました。

一方で課題も見えました。日本側ではまだまだ救援衣類を集める事が必要であること（男性衣類が足りないなど）と、寄付金も年々目減りしているため、カンパ金はもとより支援組織・法人会員／個人会員の拡充を図る取り組みが必要です。タイ・ラオス側では現地のニーズをとりまとめ、定期的にC S A事務局に伝える立場の方がが必要です。それにより現状の支援量でも最大の効果を生み出すことにつながると思います。また将来的には教育レベルの底上げにつながる活動（教師の育成支援）に転換していければ、より良い結果を生み出せると思います。

本ツアーでは違う側面の成果を生み出せたことも申し添えます。

我々C S A訪問団に、ラオス教育省初等教育局長より「救援衣類を保健省だけでなく教育省にも回して欲しい、教科書を小学校に届ける際に救援衣類も持参すれば効率的に児童に支援が行き渡る」との要請があり、同日の保健省との懇談時にその旨を交渉したところ「目的が同じであれば省庁の違いにはこだわらない、すぐ対応する」とC S A山岡事務局長が即日回答を引き出しました。

支援が必要な貧しい国とはいえ、政府機関でもない我々が関係省庁の調整まで果たすとは、まさに目からウロコ的一幕でした。これも長年の貢献によるC S Aへの信頼の証だと感銘を受けました。山岡事務局長、本当にお疲れ様でした。

## 2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 J F Eスチール福山労働組合 奥 信 明 繁

2017年ワーキング・スタディ・ツアーに参加させていただき、まずはご対応頂いたC S Aの山岡事務局長、さらに機会を下さった基幹労連の皆さま、そして受け入れをしていただいた現地の皆さまに心から感謝を申し上げます。

本ツアーに参加させていただいた私の感想は、これまでC S Aの活動については、学校建設の支援という認識であっただけに、視察のなかで目の当たりにする「救援衣類を送る運動」や「遠隔地の高校生支援」といった幅広く活動が行われていることを知り、その活動に対して心から感謝してくれている現地の方々がいるということです。



高校生寮の寮生と

8日間のツアーのなかで、特に印象に残った3点について以下にまとめてみます。

まず、1点目は現地の小学校を訪問した際のことです。

小学校は2校を訪問しましたが、最初に訪問したターディンデンタイ村小学校（19番目校）では、開校7年目を迎えており、開校当時は教室も十分足りていましたが、村の人口増加を背景に足元では、教室が不足している状況であり、7年間で大きく環境変化が生



卒寮生と交流

じていることを知りました。そうした実情をお聞きし、支援施策として学校建設を行うだけではなく、以降の設備老朽化や村の環境変化などについて、継続して状況把握を行い、必要な支援を行っていく事が重要であると強く感じました。

2点目は、サンティパーブ高校のCSA寮の視察です。

親元を離れて寮で生活する子どもたちを、私は正直にいうと可哀想だと思っていました。

しかし、家庭環境など貧困によって教育を諦めざるを得ない生徒たちが、家族や自国（ラオス）のために、海外留学や就職したい業種など、それぞれ将来の目標を定め、懸命に勉学に励んでいる状況を知り、考え方が変わりました。

遠隔地にある小学校を視察した際に感じた、整備がされていない道路状況や貧富の差などの実態を踏まえると、学校建設・補修と同様に高校生寮にも注力していくべきであると感じました。

意見交換のなかで、目を輝かせて将来の夢を語る寮生をもっと応援していきたいと心から思うことができました。

3点目は、ラオスの教育事情についてです。

教育スポーツ省初等教育局および中等教育局での意見交換のなかで、ラオスの教育事情に関する課題は遠隔地にある学校の教育充実であると聞きました。

足元の課題については、市内で充実した授業を受け教員になった先生に遠隔地の学校への赴任を希望してもらえず、学校間での教育レベルが異なることがあげられていました。

そうした課題については、ラオス国内で議論が行われるものでありますが、国全体のインフラ整備や遠隔地で勤務する教員のインセンティブなどの制度を構築し、すべての子どもたちが将来に亘って笑顔で勉学に励める環境になってほしいとの思いで一杯です。

最後に、CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加できて、これまでのCSAの各種活動が素晴らしいものであることを実感することができました。

また、一緒に参加した仲間にも恵まれ、一生の思い出を作ることができました。今後は、今回の経験をより多くの仲間に伝えていくことが、私たちの役割であると思います。

ラオスの子どもたちと同じように夢を持ち、労働運動に携わっていきたいと思います。



# 編 集 後 記

アジア連帯委員会（CSA）山岡みゆき

2017年ワーキング・スタディ・ツアーメンバーは、名頭菌団長、吉野副団長を中心に団結し、ラオス、タイでりっぱに任務を果たし、無事に帰国することができました。これは、メンバーの皆様、送り出して下さった組織の皆様、CSAの会長、副会長のお蔭と感謝申し上げます。

メンバーは、訪問・視察を通じ、衣類支援や教育環境整備の重要性を再認識すると共に、小学生とのゲームや綱引き、高校生との踊りやバーシー等の交流を通じ、その国の文化に触れ、また童心に戻り、訪問国について学ぶとともに楽しいひと時を過ごしました。

特に名頭菌団長のゲーム指導は圧巻でした。ターディンデンタイ村小学校では、400人の生徒全員を瞬く間に、ホイッスル1つで、しかも日本語で、ジャンケンゲームやボール渡しゲームに夢中にさせてしまいました。簡単で面白い！これは、新しい発見でした。

さらに、今年もビエンチャンでラオス国立大学に進学している卒業生や、ラオス省庁で働いている卒業生35名との交流の場を持ち、メンバーは片言ながら卒業生と交流しました。卒業生は、卒業年度ごとの自己紹介で、自分の専門や将来の夢を語り、口ぐちに「今あるのは、CSAのお蔭です」と感謝の言葉を述べていました。

また、今回のツアーでは、ラオススポーツ教育省初等教育局を訪問した際、ミトン局長から、「貧しい村の小学校に教科書を配布する時に、CSAが保健省に送っている救援衣類を一緒に配れば…」という要請を受けました。これを受け、同日の保健省との意見交換の場で、ソムチット副官房長官に要請内容を伝えると、快諾していただくことができましたので、ツアーとしての大きな役割が果たせたと思います。

メンバーは、小学校や高校生寮で接した純粋な瞳や笑顔など、忘れられない思い出となると思います。ラオスやタイで見たこと、感じたこと、1週間同じ釜の飯を食べた仲間との出会いを、今後の活動に活かしていただければ嬉しく思います。

最後に、チームメンバーの事務局へのご協力に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。CSA大好き！



ラオス教育スポーツ省の入口で

## CSA活動へのご支援・ご協力をお願い

下記のような方法がございます。

### 1. 会員登録によるご支援

団体会員：年会費一口10,000円から（団体、企業等）

個人会員：年会費3,000円（個人）

### <会費／募金の振込先>

#### ①郵便局

口座記号番号 00140-7-545101

アジア連帯委員会

#### ②銀行振込口座

中央労働金庫 田町支店 普通1988431

アジア連帯委員会 事務局長 山岡みゆき

### 2. 救援衣類を送るご支援

毎年、10月初旬にタイ、ラオスの恵まれない人や被災者に送るための中古衣類を集めています。

衣類の海外輸送費にあてる輸送募金もお願いしています。

### 3. 寄付によるご支援

#### (1) 救援衣類を送る運動(タイ、ラオス) 輸送募金：1,000円から

衣類提供者は1箱1,000円が目安です。輸送募金のみのご協力もお願いしています。

#### (2) ラオスで学校建設・補修をする学校建設・補修募金：1,000円から

#### (3) ラオスの高校生を支援する高校生支援募金：1,000円から

### 4. 団体や企業による学校建設・補修等のスポンサー

ラオスで学校建設・補修、教科書や文房具などの支援。

## 2017年 CSAワーキング・スタディ・ツアー報告書

発行日 2017年3月

発行者 アジア連帯委員会 (CSA)

〒105-0014 東京都港区芝 2-20-12 友愛会館 14階

Tel (03) 3769-4177 Fax (03) 3769-4178

メール：info@ngo-csa.jp

<http://www.ngo-csa.jp/>

印刷 株式会社コンポーズ・ユニ

Tel (03) 3456-1541 Fax (03) 3798-3303

